

## いわゆる特殊音節(特殊拍)について

秋 永 一 枝

### 1. ま え が き

今年もまたオシャベリをするハメになりました。いわゆる特殊音節についてのごく常識的なことを申し上げるつもりでおりました所が、日本語教育の専門家までどう勘違いされてかお出でなので、コレワ困ッタ、私ナドノ出ル幕デワナイと小さくなっている所です。そこでマコトニ常識的な説明の時は専門家には安眠して頂き、コウルサイ学者の説を引用する時は1年生には居眠りして頂くという手順で参りたいと思います。

「特殊音節とは何か?」という問題に入ります前に「音節」について一言申し上げる必要があります。これは学者によって考え方も使い方も違いますので甚だヤッカイなものです。このことは「国語学辞典」の「音節」及び「モーラ」の項を見れば一目瞭然なので、長くなりますが引用します。

音節《言語》E. syllable... 音声学的意味では、それ自身の中に何らの切れ目が感じられず、その前後に切れ目の感じられる単音の連続。...例えば、国語の [atama] (頭) は [a] [ta] [ma] という三つの音節から成る。...一方、実際の発話において生ずる音声的音節は、常に一対一の関係で音韻的音節に該当するとは限らない。...(以上服部四郎)...(A)

〔日本語の音節〕国語学では、服部四郎のいうモーラ(別項)を音節と呼ぶのが普通である。...現代語の音節を音素論的に見れば(1)母音音素一つから成るもの(服部は喉頭音音素+母音と見る)、(2)一子音(又は一半母音)+一母音から成るもの、(3)一子音+一半母音+一母音から成るもの、(4)母音ならざる特殊の一音節から成るもの、に分けられ、又アクセントの観点から見れば、高い音節と低い音節とに分けられる。これら音節は、ていねいな発音では、同じ長さに発音されようとする傾向を持ち、詩歌その他韻文の韻律の基礎をなす。...[以上金田一春彦]...(B)

モーラ《音声》mora 元来は韻律学(prosody)の用語で一短音節の長さに相当

する時間の単位。音韻論では、子音音素と短母音音素との連結、あるいは、それに等しい長さを有する音素あるいは音素連結。それは「音韻的音節」と必ずしも一致しない。例えば、日本語(東京方言)では [koto] / koto / (琴), [ko:] / koo / (甲), [kon] / kon / (紺) は、音声的にも音韻的にも、それぞれに二音節、一音節、一音節であるが、いずれも長さがほぼ等しく二モーラから成っている。……

[服部四郎]…(C)

具体的な点は人により多少の違いがありますが、この (A) (C) 対 (B) の考え方が学界の二つの流れと言えそうです。このような考え方の萌芽は、大正から昭和にかけて活躍された、音声学の草分けともいえるべき神保格氏<sup>1)</sup>・佐久間鼎氏<sup>2)</sup>に既に見られるものです。神保氏は、「西洋のシラブルといふ標準をそのままあてはめる外にまだ何か残って居りはしないか。そこで必要なのはいはゆる音節といふ標準である。」として大略 (B) のような意見を出され、橋本進吉氏<sup>3)</sup>もこれに賛同されました。有坂秀世氏<sup>4)</sup>のいわれる「音韻論的音節」も (B) 的です。亀井孝氏はこの「音韻論的音節」に対し「拍」という術語を与えられ、金田一春彦氏も盛んにこれを使用されます。(B) の「モーラ=拍」という考え方に賛同するか否かは別として、現在 (B) のようないわば「音節音韻論」的立場をとる方は、亀井孝<sup>5)</sup>・浜田敦<sup>6)</sup>・金田一春彦<sup>7)</sup>・前田正人<sup>8)</sup>・野元菊雄<sup>9)</sup>氏で、秋永もこれに左担します。

(注) 繁雑さをさけるために、参考文献・引用文献は筆者名のあとに列挙した。ただし、いちいちの文献およびページ数を示さなかった。

1) 神保格「国語音声学」「国語音声学綱要」「国語の音声上の特質(国語と国文学 4 の 4)」等

2) 佐久間鼎「日本音声学」等

3) 橋本進吉「国語音韻史」「国語音韻の研究」等

4) 有坂秀世「音韻論」「国語音韻史の研究」等

5) 亀井孝「音韻」の概念は日本語に有用なりや(国文学 15)」等

6) 浜田敦「国語音韻論における単位と体系(国語国文 28 の 3)」

「丁寧な発音とぞんざいな発音(国語国文 27 の 2)」

「国語音韻体系に於ける長音の位置——特にオ段長音の問題——(国語学 22)」

「日本語の音韻(講座日本語 II)」等

7) 金田一春彦「音声と音韻」「丁寧な発音の弁」「音韻論的単位の考」「音節・モーラおよび拍」「里親と砂糖屋」「撥ねる音・詰める音」(以上「日本語音韻の研究」所収)等

8) 前田正人「音素について——国語における音素の存在を疑う——(神戸大研究叢録 14)」「国語音韻の最小単位について(甲南大論集 32)」「長音について(国語国文 37 の 1)」等

9) 野元菊雄「国語の音韻の特色(国語教育のための国語講座 2)」

(A) (C) のいわば「音素論」的立場をとられる服部氏<sup>10)</sup>の「音韻的音節」は、有坂氏の「音韻論的音節」とはイコールになりませんし、(A) (B) 派? の柴田武氏<sup>11)</sup>は、服部氏の「音韻的音節」にあたる単位として「シラビーム (または音節素)」を、アクセント論的単位として「モーラ=拍」を使われるようで、服部氏と基本的には一致していないように思われます (例えば京都アクセントでアメ<sup>ー</sup> (雨), ハル<sup>ウ</sup> (春) のようなものを、服部氏は2モーラ (アメ), 柴田氏は3モーラ (アメ<sup>ー</sup>) とされるなど)。

諸氏の意見の紹介はこのくらいにして、ここでとり上げる「音節」とは、(B) の立場からのものです。混乱をさけるために、「拍」として話を進めたいと思います。

## 2. 特殊音節=特殊拍

「拍」を大きく二つに分け、(B) の (1)~(3) をく一般拍>, (4) をく特殊拍> とします。く特殊拍> にどこまで含めるかは、またまた意見の分れる所です。(今く> 内は人によって異なる術語。術語の次の略称はその用語の命名者を示します。)

くはねる拍> くつまる拍> をここに含めるのは、まあ異論のないところでしょう。しかし、金田一氏のいわゆるくひき音節>, ここでいうくひく拍> を認めるかどうかは賛否両論です。賛成者は、柴田・日下部文夫氏等、反対者は有坂・服部・浜田・前田氏あたりが主な所でしょうか。く引く拍> を認めるとすれば、服部氏提唱のゼロ音素 (有声喉頭音音素) を認める必要がなくなります。要約すると次のようになります。

里親	砂糖屋
(金田一・柴田) / satooja /	/ satorja /
(服部) / sato'oja /	/ satooja /
(有坂・浜田) / sato'oja /	/ sato'oja /

10) 服部二郎「音声学」「言語学の方法」「音韻論と正書法」等

11) 柴田武「音声——その本質と機能—— (国語教育のための国語講座 2)」

「日本語のアクセント体系 (国語学 21)」「方言の音韻大系 (解釈と鑑賞 35. 9)」等

(表 1)

特殊拍 〈特殊音節〉 〈特殊モーラ〉 〈付属拍〉	特 徴	具 体 音 〈代 り 音〉	音 素
はねる拍 N (有) 〈はね音節〉 (撥音, はねる音) (モーラ音素)	1 拍分声を鼻へく。 具体音のパラエティイーは、直後の音の有無や相違によってきま る。 アクセントを左 右する事があ る。①	有 声 鼻 音 閉鎖・狭 母音 持続音 ⑤	[hommo] (本も) [m] /N/ [honto] (本と) [n] [honka] (本か) [ŋ] [hoijori] (本より) [i] [hoūwa] (本は) [ū] 等 ⑥
ひく拍 R (金) 〈ひき音節〉 (長音後部要素) (ひく音)	1 拍分声をそのま ま(口構えをひ かえないで)ひ く。具体音のパ ラエティイーは直 前の音の違いに よってきまる。 アクセントによ って左右され る。②	有 声 口 音 開放 持続音	[oba:saN] (お婆さん) [a] /a/ [oni:saN] (お兄さん) [i] /i/ /R/ [ku:ki] (空気) [u] [w] /u/ (金・柴) [ke:re:] (敬礼) ⑦ [e] /e/ [sato:ja] (砂糖屋) [o] /o/ (服・浜)
そえる拍(秋) J(柴) 〈そえ音節〉 〈二重母音後部要 素〉(服・柴) 〈連母音後部要素 (金)	1 拍分二重母音の 後部要素のう に前の母音に そえて発音す る。具体音のパ ラエティイーは その母音及び 直前の母音の 相違によっ てきまる。 アクセントによ って左右され る。③	有 声 口 音 狭母音 持続音	[kai] [kai] (会) [koi] [koi] (鯉) [i] [i] [rui] [rui] (類) ([kau] (飼う) [kaeru] (帰る))
つめる拍 Q (服) τ (有) 〈つめ音節〉 (促音, つめる音) (モーラ音素)	急に声をとめ て1 拍分持続す る。具体音のパ ラエティイーは 直後の音の有 無や相違によ ってきまる。④	無 声 口 音 閉鎖・狭 窄(摩擦) 持続音	[kokka] (国家) [isso:] (一層) [i]jo:] (一生) [ippo:] (一方) [kette:] (決定)



特殊拍 〈特殊音節〉 〈特殊モーラ〉 〈付属拍〉	特 徴	具 体 音 〈代 り 音〉	母 音 音 素
かすれる拍×(秋) 〈かすれ音節〉 (無声化母音, 母 音の無声化)	1 拍分母音を無 声化させ摩擦音 を出す。 具体音のバラエ ティーはその拍 の母音・子音及 び直前直後、時 には促音をはさ んだ次の音の相 違によってきま る。 アクセントによ って左右され る。	無 声 [k̥ita] [k̥cta] (来た) 口 音 [k̥usa] [k̥xsa] (草) 狭窄(摩 [Φ̥utari] [Φ̥tari] (二人) 擦) [arimas̥] [s̥-ki] (好き) 持続音 [s̥uki] ([h̥aka] [xka] [k̥okoro] [k̥xkoro]) 等	/i/ /i̥/ /u/ /u̥/  (/a/ /ḁ/ /o/ /o̥/)

#### 備 考

##### 略称(敬称略)

有=有坂秀世, 亀=亀井孝, 金=金田一春彦, 服=服部四郎, 浜=浜田敦, 前=前田正人, 秋=秋永一枝

- ① (佐)「[ŋ] の口腔におけるおしあけの過程のない鼻音」[n]  
(有)「口腔に於ける調音位置の如何を超越した専門の鼻音韻」(n)  
(金)「破裂のない鼻音一般」
- ② (服)「長母音は二つの母音音素の連続に該当する」  
[oba:san] [odʒi:sa:n]  
/ˈoba:sa:n/ /ˈozi:sa:n/  
(有)「長母音は音声学的見地からのみ認められるべきもの。音韻的には  
《o-o》《u-u》《e-e》の一つの発音法にすぎない。」  
(浜)「長音 /a, i, u.../ を母音モーラ /ˈa, ˈi, ˈu.../ と区別すると云う考  
えをも採らず, それと全く同じ音韻と解釈する」  
[go:re:] [ku:tʃu:]  
/goˈoreː/ /kuˈtʃuː/  
(前)「長音は二音節にまたがる音韻的単位である」
- ③ (有)「二重母音は音声学的見地からのみ認められる。[ai]. 音韻論的に見れば  
《a-i》の一つの発音法にすぎない」
- ④ (服)「その後続子音とともに重子音をなすといえる。[issu:n] [itto:]. 但し音韻  
論的には /ˈi2su:n/ /ˈi2too/ と解釈すべきでもある。
- ⑤ (亀)「撥音・促音は広義の母音」
- ⑥ おおむね(服)「音声学」の表記による。
- ⑦ (有)「多くの個人によって《イ》とも《エ》とも意識される」  
(金)「《イ》とも意識され, 《〜》とも意識される」

この他柴田氏は、〈付属拍〉として「二重母音の拍部要素〈j〉」を認めています<sup>11)</sup>。秋永は〈そえる拍〉または〈そえ音節〉として、ここに含めることに賛成します。但し、〈そえる拍〉を ai, oi, ui の /i/ に限定すべきか否かは考慮中です。

なお (B) 的立場をとる人は「1一般拍+1特殊拍=2拍」ですが、(A)(C) 的立場をとる人はそれぞれ /CVN/, /CVQ/ または /CVr/, /CVV/ または /CVR/, /CVj/ で、2 モーラ 1 シラブルということになります。またゼロ音素を認めない立場も含めれば /C/ は / (C) V / のようにすべて ( ) 内に入れることが可能です。

もう一つ、いわゆる「母音の無音化する拍」を〈かすれる拍〉または〈かすれ音節〉記号〈x〉としてここに追加したいと思います。〈特殊拍〉に準じるという意味です。但しこれは、具体音のバラエティーが多様多様のため、〈x〉を音素として用いることは不可能ですが、この〈かすれる拍〉を表わす際便宜上 xCV, CVx のように使用することは、アクセント解説の折などに有用だと思います。この時〈x〉は、x=無音子音+(主として)無声化狭母音 [h̥a] [s̥ɥki] の場合もあれば、x=無声子音のみの [h̥a] [s̥ki] の場合もあるわけです。

以上のような特殊拍は、お互いに似た特徴を持っています。諸先学の意見を参照しながらまとめると(表 1) のようになります。

### 3. 特殊拍とアクセントとシラブルの関係

このような特殊拍は、当然アクセントと深い関係を持って来ます。特殊拍は独立性の少ない音韻です。多くの地方で、特殊拍にアクセントの高さの切れめがおきにくいという傾向があります<sup>12)</sup>。

たとえば 1 一般拍 (○) + 1 特殊拍 (⊕) = 2 拍 1 シラブルという方式でいきますと、カン(缶), テン(天), スー(数), コー(甲), カイ(会), ハイ(感)は 2 拍 1 シラブルの語です。しかし、カン(勘), テン(点), スウ(吸)<sup>12)</sup>,

12) 秋永はふつう佐久間氏のいわれるように(注 2)「ウ」[u] と「変的ウ」[u̥] を区別し、「吸う」[s̥u̥u]、数 [s̥u̥:] のように発音し、前者の「ウ」を〈一般拍〉、後者を〈引く拍〉と考えます。但し、佐久間氏のように口の構えは変わらず、舌の位置だけ移動します。しかし、早めに発音すると、「吸う」[s̥u̥:] のようにも発音します。

$\overline{\text{コ}}\text{ー}$ (～いう),  $\overline{\text{カイ}}$ (が<sup>レ</sup>ない),  $\overline{\text{ハイ}}$ (灰)となると, 2拍2シラブルのようになりますし, 少しむずろさに発音すれば,  $\overline{\text{カン}}$ ,  $\overline{\text{テン}}$ ,  $\overline{\text{ズー}}$ ,  $\overline{\text{コー}}$ ,  $\overline{\text{カイ}}$ ,  $\overline{\text{ハイ}}$ のように2拍1シラブルのように発音されます。この場合アクセントは変化型をとります。 $\overline{\text{エンピツ}}$ ,  $\overline{\text{シンルイ}}$ ,  $\overline{\text{コーバン}}$ ,  $\overline{\text{クーチャー}}$ ,  $\overline{\text{ケーレー}}$ ,  $\overline{\text{カイダン}}$ ,  $\overline{\text{スイカ}}$ ,  $\overline{\text{コイコク}}$  ( $\textcircled{\oplus}\dots$ )の類も, むずろさな発音では $\overline{\text{エンピツ}}$ ,  $\overline{\text{シンルイ}}$ ,  $\overline{\text{コーバン}}$ ,  $\overline{\text{クーチャー}}$ ,  $\overline{\text{ケーレー}}$ ,  $\overline{\text{カイダン}}$ ,  $\overline{\text{スイカ}}$ ,  $\overline{\text{コイコク}}$  ( $\textcircled{\oplus}\dots$ )のような変化型になります。このアクセントの音韻的な型は  $/\textcircled{\oplus}\dots/$  型 / と認めるのが普通で, 辞書とか教科書はすべてそう表記しますが, 東京の若い層では変化型  $/\textcircled{\oplus}\dots/$  が音韻的な型としてもだんだんに固定してくる傾向のように思われます。そして意識的に規則型に発音しようとするとき1一般拍+1特殊拍は1シラブルではなく2シラブルのように発音される傾向があり, その際特に〈ひく拍〉〈そえる拍〉などは一般拍の母音に近くなってしまいます。例えば $\overline{\text{コオニ}}$ (小鬼)は3拍3シラブル,  $\overline{\text{コーニ}}$ (高二)は3拍2シラブルですが,  $\overline{\text{コーニ}}$ (高二)と規則型アクセントに発音する時は, 2シラブルと意識する人と3シラブルと意識する人とが現われます。そしてこの場合の〈引く拍〉は一般拍に近くなり  $\overline{\text{コオニ}}$ (小鬼)との区別がまぎらわしくなります。このような, シラブルの単位を〈音韻的音節〉として認めた場合は, アクセントの〈変化型〉も「音韻的な型」として認めざるを得ないような気がします。私は現在の東京アクセントの段階から考えると, 〈変化型〉を音韻的な型とすることにためらいを感じますし, その他の点からも, 私は「シラブル」を「音声的音節」とし, 日本語の音韻的単位としては「拍=音節」を認めたと思います。

なお, 〈つめる拍〉と〈かすれる拍〉の変化型は似ています。音声的な型としては  $\overline{\text{ガッコー}}$ ,  $\overline{\text{イッショウ}}$ ,  $\text{オヒトツ}$ ,  $\text{ザシキ}$  のようになりますが, 音韻的な型としては,  $/\textcircled{\oplus}\dots/$  のように認められています。これらについての個人的な考えは別の機会に談りたいと思います。

(表 2)

				A. JAPANESE READER (R.A. MILLER)	AN INTRODUCTORY TO WRITTEN JAPANESE 日本文入門 (P.G.O'NEILL, S. YANADA)	BASIC JAPANESE FOR COLLEGE STUDENTS (T. NIWA, M. MATSUDA)
はね る音 N	m n n', n-, ñ	n ñ N	ñ	shimbun, sampo, semmenjo ginkō, eigakan, hon kan'on, tan'on	sinbun, ginkoo densya, hon tan-i, kinyoo-bi	shimbun, empitsu, hambun densha, mannenhitsu, hon, kiñyoo
つめ る音 Q, T	kk ss tt pp			gakkō zassi mittsu, motto- mo Nippon, ippai, jippiki	gakkoo zassi mittsu ippon, ippai, kippu	gakkoo, ikkagetsu, nikki zasshi, issho, issatsu motto, mittsu ippon, jippon, kippu
ひく音 R	aa ii uu ee oo	ā ii ū ē ō		okāsan atarashii, ōkii, chiisai tochū, yū nēsan gakkō, ōkii, ōzei	okaasan ookii, tiisai, niisan totyuu, yuu neesan gakoo, ookii, suiyoo-bi	okaasan atarashii, ookii, chiisai yuu, gyunyuu, chuushin ee gakkoo, ookii, suiyoobi
	ei	ee		eigakan, ōzei, seiji	eigakan, seizi	eega, oozee, secji
連母音 の後部 J	ai ui oi			kaisha, maiasa yasui, furui, shurui osoi, omoshiroi, oyoide	kaisya, mainiti yasui, hurui suiyoo-bi tsuyoi, Doitu	kaisya, mainichi yasui, furui, suiyo osoi, omoshiroi, omoidasu
母音の 無声化 x	i u	ɨ ɥ		hitori, chikai shichi tsukeru, arimasu	kisya, hitori tikai hutari, arimasu, kusuri	kisha, hito, chikai futari, arimasu
ガ行鼻 音 り	g	g̃		eigakan, tegami	eigakan, tegami	eega, tegami
アクセ ント	ˈ	ˈ	ˈ			empitsu, heyá, hón empítsudésu

BEGINNING JAPANESE Part 1 (E. H. JORDEN)	ESSENTIAL JAPANESE (S. E. MARTIN)	JAPANESE (C. J. DUNN, S. YANADA)
sinbuñ, enpitu hoñ kiñyoo	shimbun, sampo, kembutsu ginkō, mannenhitsu, hon tan-i, sen-en	sinbun, enpitu densya, hon kin-iro, kinyoo-bi, tan-i
gakkoo zassi, issyo motto, mi-ttsu ippai, kippu	gakkō, yukkuri, yokka zassi, issatsu, issho chotto, mitsutsu ippen, happyaku, kippu	gakkoo, sukkari, kekkon zassi, issyo, bas-suru tyotto, asatte, kitte Nippon, kippu, sippo
okaasan atarasii, ookii, tiisai yuube, gyuunyuu, tyuu- gokuō neesan gakkoo, ookii, suiyoobi	depāto, mā! ōkii, chiisai, muzukashii gyūnyū, futsū, raishū nēsan gakkō, ōki, byōki	okaasan, obaasan atarasii, ookii, tiisai yuu, hutuu, kuuki neesan gakkoo, ookii, kooen
eeḡakan, meesi	teinei, kirei, eigo	eiga, kirei
kaisya, mainiti yasui, hurui, suiyo omosiroi, tuyoi, doitsuḡo, toire	kaisya, maiasa, hayai furui, warui, suika ōmoimasu, omoshiroi	maiban, rainen, sinpai yasui, hurui, suihei, syurui omoi, isoide, Doitu
kisya, hito, tikai (susumu, hatoi, kushami)	k(i)sha, h(i)to, ch(i)kai (k(u)suri, f(u)tatsu, arimas(u))	hito kusuri, arimasu
eeḡakan, siḡoto	eigakan, tegami, ringo	eiga, tegami, ringo
enpitu, heyá, anata, hoñ	shimbun, heyá, anáta, hón	

					JAPANESE IN THIRTY HOURS (E. Kiyooka)	LEARN JAP- ANESE I (J. YOUNG, K. NAKAJIMA)	MODERN JAP- ANESE A BASIC READER 日本現代文読本 (H. Hibbet, G. Itasaka)
はね る音 N	m	n	n	n̄	shinbun, enpitsu	shin'bun, ben'kyoo	shinbun, sanpo
	n		n'	n̄	densha, hon	den'sha, hon	ginkō, hon
	n'..., n-, n̄			N	kin-yoobi, tan-i	Den'en	kin'yōbi
つめ る音 Q, T	kk				gakkoo, mikka	gakkoo, kekkyo- ku, Nikkoo	nikki, yokka, hakkiri
	ss				issatsu, jissen	zasshi, issho, kissaten	zasshi, issho, issai
	tt				motto, mittsu	tyotto, chittomo, yottsu	mottomo, mittsu, zutto
	pp				Nippon, ippai, kippu	ippai, happyaku, kippu	jippun, ippō, shuppan
ひく音 R	aa		ā		okaasan	okaasan	okāsan, sorejā
	ii		ii (ī)		ookii, chiisai	ookii, chiisai, yasashii	atarashii, chiisana, nīchan
	uu		ū		chuu-gakkoo, raishuu, juu	juu	chūgakkoo, futsū, yūgata
	ee		ē		meetoru	Ee, . . . nee	nēsan, pēji
	oo		ō		gakkoo, ookii, suiyoobi	gakkoo, ookii, ben'kyoo	chōdo, doyōbi, benkyō
	ei		ee		eiga, Ei-go, kirei	eiga, kirei	eigo, kirei, tokei
連母音 の後部 J	ai				rai-nen, taihen, yo-mai	kaisya, raigetsu, taitei	hayai, taihen, kaiwa
	ui				yasui, warui, suiyoobi	warui, atsui	warui, samui, suiyōbi
	oi				omoshiroi, tsuyoi, koi	yoi, Doitsugo	omoshiroi, yoi, Doitsu
母音の 無声化 x	i		i		kisha, hito, chi- kai	hito	hitori, chikai, shichi
	u		u		futatsu, tsukue	futari, arimasu	futari, tsukuru
ガ行鼻 音 g	g		ḡ		tegami, Ei-go	Eigo, ringo	eiga, yūgata, Nihongo
アクセ ント	ˈ	ˌ	ˋ	ˊ		uchi, ootoo. okaasan, yoi	

MODERN JAPANESE FOR UNIVERSITY STUDENTS Part I (International Christian University)	NAGANUMA'S PRACTICAL JAPANESE (N. Naganuma)	NIHOŌGO NO HANA- SIKATA [How to speak Japanese] (Kokusai Gakuyuukai)
sinbun, sanpo ginkoo, hon kinyoo	shimbun, sampo, empitsu ringo, okāsan, hon kin'yōbi, pan'ya	shiñbun, sañpo giñkoo, hoñ kiñyoobi, señeñ
gakkoo, kekkon, syokkoo zassi, issyo, ossyaru mattaku, chittomo, asatte koppu, ippon	gakkō, ikkagetsu, hakkiri zasshi, isshūkan mittsu, asatte, chotto Nipponjin, kippu, rippa	gakkoo, mikka, ikkagetu zassi, issyoni, issatu motto, mittu, kitto ippai, happyakueñ
okaasan atarasii, ookii, chiisai cyuugaku, konsyuu, zyuunigacu necsan, teeburu ginkoo, ookii, byooki	okāsan, obāsan ōkii, chiisai, imasu jū, isshūkan, yūgata nēsan gakkō, ōkii, bōshi	okaasañ, obaasañ atarasii, ookii, oniisañ zyuu, gyuunyuu, yuube meetoru gakkoo, ookii, suiyoobi
gakusee, cego, kiree	seito, kirei, tokei	eiga, seito, kirei
maiasa, taihen, akai hurui, acui, suiyo yoi, siroi, boikotto	raigetsu, akai, kaiwa atsui, samui, suiyoobi kiiroi, nioi	akai, maiasa, taiheñ yasui, warui suidoo siroi, kuroi, isoide
hito, kiku, sicinin watakushi, sakosi, hutacu	hito arimasu, tsukue, futatsu	hito, tikai rukue, hutatu
cego, yuugata, raigecu	tegami, ringo, yūgata	eiga, tegami, riñgo
daigaku, heyá, anáta, hón		

## (表 3)

一般 拍	特 殊 拍	一般 拍	特 殊 拍
(a) ハアト (齒跡) キイ (奇異) アイシデス (委因) シイシ (死因) シイル (強) スリ* (吸) クリ* (食) スクリ (酢死リ) コカニ (小鬼) サトオヤ (里親) オオサマ (お納め) ゴカク (王位)	ハート (heart) キー (key) アイシデス (良い) シーン (scene) シール (seal) スー (数) クー (空) スーリ (数理) コニニ (高二) サトーヤ (砂船屋) オオサマ (大艘) ゴーク (業指)	トオカラ (戸) オオイ (多) ユーオ (好悪) (b) エイリ (絵入り) カケイ (覧) ケイロ (毛色) ケイトオ (毛糸を) (c) カケエ (彫像) (d) クイ (他意) ゲカイ (外科医) ハイシヤ (歯医者)	トーカラ (十) オーイ (多) ユオー (呼吸) ユーリ (管利) カケー (家計) ケーロ (経路) ケートー (系統) カケー (家芸) タイ (隊) ゲカイ (下界) ハイシヤ (産者)



#### 4. 日本語教育での扱い

では、これら〈特殊拍〉が日本語教育でどのように扱われているかを紹介し、私の意見も申し述べたいと思います。まず、手許にあるローマ字書きの教科書を対照してみますと、(表2)のようになります。(参考のため、ガ行鼻音とアクセント表記ものをせておきました。)

##### (1) はねる拍

- ① m (後続音が唇音の時), n (その他の時)
- ② n' (後続音のある時), n (ない時)
- ③ n のみ。
- ④ ñ または ñ または N

分類すると ①～④ のようになります。(表1)でも述べたように、はねる音は直後の音の有無や相違により、いろいろのパラエティアーがあります。それを m と n で書きわけると ① の方式は習慣的な表記とはいえ賛成しかねます。後続音の有無で書きわけると ② の方式は「金曜日」を「キニョービ」と読む誤りから開放されますし、「可能」(kano:) と「観桜」(kan'-o:), 「単位」(tan'i) と「谷」(tani) 等の区別ができるという点で便利です。①③ はこの場合、後続音が母音・半母音に限り n'..., n-..., ñ... のようにしるしを付けて kan'on, tan'on, tan-i, sen-en, kiñyoo としてあるのも同様に便宜的なものでしょう。私は、①②③を通じて、ナ行子音と同じ表記をくはねる音〉に使用する点が賛成できません。“n”とあると、外国人は後続音が唇音である場合をのぞき [n] の調音をとろうとしがちです。そのために日本的な発音になりにくいという事があります。私としては ④ の方式、できれば“N”を使いたいと思います。

##### (2) ひく拍

- ① aa, ii, uu, ee, oo
- ② ā, ii, ū, ē, ō (日本現代文読本に限り ii と ī の両様)

以上の二通りでした。母音を二度書く方法だと表記は簡単ですが、その母音が一般拍であるか特殊拍であるか区別が付きません。つまり(表3)(a)

のような書きわけは行なわれない事になります。(今アクセントの相違は一応無視します。また…はアクセントが変化型になった時に高くなる部分。ウ\*はむしろさな発音ではひく音にもなることを示します。)

また、殆どの教科書に共通している事は、ii を  $\bar{i}$  にせず、すべて二度書くという方法です。これは  $\bar{i}$  という形がとりにくいせいかとも思えます。形容詞の活用語尾を〈ひく拍〉にするかどうかは問題のあるところですが、そのために ii をとったのでもなさそうです。なぜなら「言う」の類は yū と表記されてますから。(但し、「日本現代文読本」や学友会の教科書では iu です。「言う」の発音は“ユー”ではなく“イウ”と発音せよという意味でしょうか。)〈ひく拍〉の場合、母音を二度書く方法に私は賛成できません。「里親」も「砂糖屋」も satooya, 「好悪」も「呼応」も kooo では困りものです。私なら、satooya と sto:ya, ko:o と koo: としたいところです。

もう一つ、エ列音の次のイは、九州、四国南半、紀伊半島南部をのぞいて、現在エ列長音になるのがふつうですが、ee の表記よりは ei 表記の方が好まれているようです。ei を使う教科書は、音韻的に ei の方が正しいと見たのか、「かな」表記に準じたのか、その辺の所が分りません。ē が全然出て来ないのは、ひく拍に ē, ē, ō 表記をとる教科書が、この場合に限ってすべて ei 表記をとったためです。ei 表記をとる立場だと、(表 3) の (b) のような例はどう教えるのでしょうか。「発音は異なるが表記は同じだ」とするのか、「発音も表記も同じだ」という立ち場を取るのかです。(c) と関連してくる問題です。私は「絵入り」は eiri, 「営利」は e:ri あるいは ei\*ri のような表記をしたいと思い、かつて(表 3) で述べた吸ウ\*のウ\*と同様、エイ\*リ と \* をつけて表示したことがあります。<sup>13)</sup>

### (3) そえる拍

これはすべて〈特殊拍〉扱いをしていません。これは教師が説明をすればいい事かもしれません。

13) 秋永一枝「佐柳アクセントの提起するもの(国文学研究 33)」『明解日本語アクセント辞典』

(4) つめる拍 Q 又は r

① kk, ss, tt, pp

これは ① の表記だけで、Q も r も見当りませんでした。はねる拍に N を使った ICU あたりが使いそうだと思ったのですが慣習によったものでしょうか。ところで、アッ! というのはどう表記してあるかと思って探したのですが、A! が一、二出てきただけでした。A! では ア! なのかアッ! なのか見当がつきません。とはいえ Att! と表記するのも妙なもので A! でごまかしたのかもしれません。また バッハ、ゴッホ、ベッド、バッグ、ブルドッグ、ホットドッグなどは Bahha, Gohho, beddo, baggu, buludoggu, hottodoggu のようになるのでしょうか。なかなかその例が見付かりません。ともに、Q とか r を使っておけば Ar!, dorgu と問題はないわけですが。

(4) かすれる拍 x

① i, u

② ɪ, ʊ

② の使用は ICU のみです。② の表記のように何らかのしるしをつけることには賛成ですが、個々の点では賛同しかねるものもあります。(例えば磯を iso と表記するなど) 表中 ( ) 内に入れたものは、教科書の本文には注記しないが解説の部分にはそのように注記してあるという意味です。

私としては、アクセント表記をする場合には〈かすれる拍〉の表示も行ないたいと思います。関連がありますので。

以上のように見て参りますと、一般にローマ字書の教科書には、正書法と発音表示が同居しているような感じがします。私個人としては教科書のローマ字表記はとらない立場です。ローマ字から入った者は母国語のローマ字にひかれていつまでたっても日本的な発音に馴れないように思われるのです。普通の教科書は「かな漢字まじり」とし、発音は別に、できれば学生の母国語に合わせてプリントをつくりたときこみたいものです。これは〈一般拍〉、〈特殊拍〉を含めての問題です。但し、一般拍の方は各

国語によって教育内容にズレがありますが、特殊拍の方は外国人すべて最も苦手とするもので、共通の教材ですむ筈です。初級向けのそうした教材がぜひとも欲しいものです。勿論、以上参照した教科書の表記がどうあると教師がそれをどのようにこなしていくかにかかっている事は申すまでもありません。